





新村  
降旗

東京音樂學校講師 上眞行作曲

大阪師範學校教諭 多梅稚作曲

地理  
教育  
**鐵道唱歌**  
第一集

大和田建樹作歌

鐵道唱歌 多梅稚作曲



キータキ イツセイ シンバシ チ  
 みーぎは たかなわ せんがく じ  
 マドヨリ チーカク シナガハ ノ



ハヤラが キシヤハ一 ハナレタ リ  
 しーじふ しちしの はかごこ ろ  
 ダイバモ ミーエテ ナミシロ ク



アタゴノ ヤーマニ イリノコ ル  
 ゆーきは きえても きえのこ る  
 ウーミノ アナタニ ウスガスマ



ツーキチ タビザノ トモトシ テ  
 なはせん ざーいの のちまでも  
 ヤーマハ カツサカ バカシウ カ

一 三 木 樂 器 部 ハ 誠 實 ト 迅 速 ト 廉 價 ト	何 時 ニ テ モ 取 揃 へ 御 注 文 ニ 應 ズ	外 ノ 樂 器 ヲ 販 賣 ス 樂 隊 用 樂 器 等 ハ	一 三 木 樂 器 部 ハ 以 上 ノ 外 有 ラ ユ ル 内	シ テ 其 價 ハ 頗 ル 廉 ナ リ	モ 舶 來 品 ニ 劣 ル 處 ナ キ ニ 至 レ リ 而	ノ 進 歩 ヲ 遂 ケ 今 ヤ 何 レ ノ 點 ニ 於 テ	一 鈴 木 ウ ヰ イ オ リ ン ハ 其 製 作 上 長 足	テ 之 ヲ 證 明 ス	製 風 琴 ノ 巨 擘 タ リ 東 京 音 樂 學 校 嘗	一 山 葉 製 風 琴 ハ 構 造 堅 固 音 律 精 確 國
--	--	---	--	--	---	---	--	----------------------------	---	--

鐵道唱歌 上真行作曲

キテキイツセイシンメンチ  
 みーぎはたかなわせんがくじ  
 マドヨリチーカクシナガハノ  
 ハヤロガキシヤハハナレタリ  
 しじふしちしのほごころ  
 ダイバモミエテナミシロク  
 アタゴノヤーマニイリノコル  
 ゆーきはきえてもきえのころ  
 ウーミノアナタニカスガスマ  
 ツーキチタビザノトモトシテ  
 なはせんざーいのちまでも  
 ヤーマハカヅサカバカマウカ

東海道

一 汽笛一聲新橋を  
 愛宕の山に入りのころ  
 はや我汽車は離れたり  
 二 右は高輪泉岳寺  
 月を旅路の友として  
 四十七士の墓どころ  
 雪は消えても消えのころ  
 名は千載の後までも

新橋

三 窓より近く品川の

臺場も見えて波白く

海のあなたにうすがすむ

山は上總か房州か

四 梅に名をえし大森を

すぐれば早も川崎の

大師河原は程ちかし

急げや電氣の道すぐに

品川

大森

川崎

五 鶴見神奈川あそこにして

ゆけば横濱ステーション

湊を見れば百舟の

煙は空をこがすまで

六 横須賀ゆきは乗替こ

呼ばれておるゝ大船の

つぎは鎌倉鶴が岡

源氏の古跡や尋ね見ん

鶴見

神奈川

横濱

程谷

戸塚

大船

鎌倉

七 八幡宮の石段に

立てる一木の大鴨脚樹

別當公曉のかくれしこ

歴史にあるは此蔭よ

八 こゝに開きし頼朝が

幕府のあこは何かたぞ

松風さむく日は暮れて

こたへぬ石碑は苔あをし

九 北は圓覺建長寺

南は大佛星月夜

片瀬腰越江の島も

たゝ半日の道ぞかし

一〇 瀛車より逗子をながめつゝ

はや横須賀に着きにけり

見よやドツクに集まりし

わが軍艦の壮大を

●逗子

●横須賀

一 支線をあとに立ちかへり

わたる相模の馬入川

海水浴に名を得たる

大磯みえて波すし

二 國府津おるれば馬車ありて

酒匂小田原さほからず

箱根八里の山道も

あれ見よ雲の間より

藤澤

茅ヶ崎

平塚

大磯

國府津

松田

三 いで、はくゝるトン子ルの

前後は山北小山驛

今もわすれぬ鐵橋の

下ゆく水のおもしろさ

四 はるかにみえし富士の嶺は

はや我そばに來りたり

雪の冠雲の帯

いつもけだかき姿にて

山北

小山

御殿場

佐野



一五 ころぞ御殿場夏ならば

われも登山をころみん

高さは一萬數千尺

十三州もたゞ一日

一六 三嶋は近年ひらけたる

豆相線路のわかれみち

驛には此地の名をえたる

官幣大社の宮居あり

三島

一七 沼津の海に聞えたる

里は牛伏我入道

春は花さく桃のころ

夏はすゞしき海のそば

一八 鳥の羽音におどろきし

平家の話は昔にて

今は瀧車ゆく富士川を

下るは身延の歸り舟

沼津

鈴川

岩淵  
蒲原

一九世に名も高き興津鯛

鐘の音ひゞく清見寺

清水につゞく江尻より

ゆけば程なき久能山

二〇三保の松原田子の浦

さかさにくつる富士の嶺を

波にながむる舟人は

夏も冬こや思ふらん

興津

江尻

二二駿州一の大都會

静岡いで、阿部川を

わたればこゝぞ宇津の谷の

山きりぬきし洞の道

二三鞆より抜けておのづから

草なきはらひし御劍の

御威は千代に燃ゆる火の

焼津の原はこゝなれや

静岡

焼津

二三 春はるさく花はなの藤枝ふぢも

藤枝

すぎて島田しまだの大井川おおいがわ

島田

むかしは人ひとを肩かたにのせ

わたりし話はなしも夢ゆめのあこ

金谷

二四 いつしか又またも暗やみなる

世界せかいは夜よるかトン子とんこルか

堀之内

小夜さよの中山なかつやま夜泣石よなきいし

問とへども知しらぬよその空そら

二五 掛川かけがわ袋井ふくろ中泉なかつづみ

掛川

いつしかあまに早はやなりて

中泉

さかまき來きたる天龍てんりゅうの

天龍川

川瀬かはせの波なみに雪ゆきぞちる

二六 この水みづ上かみにありと聞きく

諏訪すわの湖水こすゐの冬ふゆげしき

雪ゆきと氷こほりの懸橋かけはしを

わたるは神かみか里人さとびとか

二七 琴ことひく風かせの濱松はままつも

菜種なねに蝶てふの舞坂まひさかも

うしろに走る愉快ゆかいさを

うたふか磯いその波なみのころ

二八 煙けむりを水みづに横よこたへて

わたる濱名はまなの橋はしの上うへ

たもと涼すずしく吹ふく風かせに

夏なつものこらずなりにけり

濱松  
舞坂

二九 左ひだりは入海うみしづかにて

空そらには富士ふじの雪ゆきしろし

右みぎは遠州えんしゅう洋やうちかく

山やまなす波なみぞ碎くだけちる

三〇 豊橋とよはしおりて乗のる瀛車しやは

これぞ豊川とよがわ稻荷道いなぎみち

東海とうかい道だうにてすぐれたる

海うみのなむめは蒲郡かきごほり

鷺津  
二川  
豊橋  
御油  
蒲郡

三二 見よや徳川家康の

おこりし土地の岡崎を

矢矧の橋に残れるは

藤吉郎のものがたり

三三 鳴海しぼりの産地なる

鳴海に近き大高を

下りておよそ一里半

ゆけば昔の桶狭間

岡崎  
安城  
荻谷  
大府  
大高

三三三 めぐみ熱田の御やしるは

三種の神器の一つなる

その草薙の神つるぎ

あふげや同胞四千萬

三四 名だかき金の鯨は

名古屋の城の光なり

地震のはなしまだ消えぬ

岐阜の鶺鴒も見てゆかん

熱田

名古屋  
清洲  
一ノ宮  
木曾川  
岐阜

三五 父ちちやしなひし養老やうらうの

瀧たきは今いまなほ大垣おほがきを

大垣

三里さんりへだて、流ながれたり

孝子かうしの名譽めいよもろこもに

垂井

三六 天下てんかの旗はたは徳川とくがわに

歸きせしいくさの關せきが原はら

關原

草くさむす屍かばねいまもなほ

吹ふくか膽吹いぶの山やまおろし

三七 山やまはうしろに立たち去さりて

前まへに來きたるは琵琶びわの海うみ

長岡

ほそりに沿そひし米原まいはらは

北陸ほくろく道みちの分岐ぶんぎ線せん

米原

三八 彦根ひこねに立たてる井伊いの城しろ

草津くさつにひさぐ姥うばが餅もち

彦根

かはる名所めいしょも名物めいぶつも

旅たびの徒然とぜんのうさはらし

能登川

八幡

三九 いよく 近く 馴れくるは

近江の海の波のいろ

その八景も居ながらに

見てゆく旅の楽しさよ

四〇 瀬田の長橋右に見て

ゆけば石山観世音

紫式部が筆のあと

のこすはこよ月の夜に

野洲 草津 馬場

四一 栗津の松にこそへば

答へがほなる風の聲

朝日將軍義仲の

ほろびし深田は何かたぞ

四二 比良の高嶺は雪ならで

花なす雲にかくれたり

矢走にいそぐ舟の帆も

みえてにぎはふ波の上

四三 聖田におつる雁がねの  
たえまに響く三井の鐘

夕ぐれさむき唐崎の

松にや雨のかゝるらん

四四 むかしながらの山ざくら

にほふところや志賀の里

都のあさは知らねども

逢坂山はそのまゝに

大谷

四五 大石良雄が山科の

その隠家はあともなし

赤き鳥居の神さびて

立っは伏見の稻荷山

稻荷

四六 東寺の塔を左にて

こまれば七條ステーション

京都々々と呼びたつる

驛夫のこゑも勇ましや

京都



四七 こゝは桓武のみかどより

千有餘年の都の地

今も雲井の空たかく

あふぐ清涼紫宸殿

四八 東に立てる東山

西に聳ゆる嵐山

かれとこれとの麓ゆく

水は加茂川桂川

四九 祇園清水智恩院

吉田黒谷眞如堂

ながれも清き水上に

君がよまもる加茂の宮

五〇 夏は納涼の四條橋

冬は雪見の銀閣寺

櫻は春の嵯峨御室

紅葉は秋の高雄山

五一 琵琶湖を引きて通したる

疏水の工事は南禪寺

岩切り抜きて舟をやる

智識の進歩も見られたり

五二 神社佛閣山水の

外に京都の物産は

西陣織の綾錦

友禪染の花もみぢ

五三 扇おしろい京都紅

また加茂川の鷺しらす

みやげを提げていざ立たん

あこに名残は残れども

五四 山崎おりて淀川を

わたる向ふは男山

行幸ありし先帝の

かしこきあそぞ忍ばるゝ

向日町

山崎

五五 淀よどの川かは舟ふねさをさして

くだりし旅たびはむかしにて

また、くひまに今いまはゆく

煙けむりたえせぬ陸くわの道みち

五六 おくり迎むかふる程ほどもなく

茨木すま吹田ふいたうちすぎて

はや大阪おほさかにつきにけり

梅田うめだは我われをむかへたり

高槻 茨木 吹田 大阪

五七 三府さんぷの一いつに位くらゐして

商業しやうぎや繁華はんくわの大阪おほさか市し

豊太閤ほうたかのきづきたる

城しろに師團しだんはおかれたり

五八 こゝぞ昔むかしの難波なにはの津つ

こゝぞ高津たかつの宮みやのあこ

安治川あぢがは口ぐちに入る舟ふねの

煙けむりは日夜にちやたえまなし

五九 鳥も翔らぬ大空に

かすむ五重の塔の影

佛法最初の寺と聞く

四天王寺はあれかこよ

六〇 大阪いで、右左

菜種ならざる畑もなし

神崎川のながれのみ

浅黄にゆくぞ美しき

神崎

六一 神崎よりはのりかへて

ゆあみにのぼる有馬山

池田伊丹と名にき、し

酒の産地もとほるなり

六二 神戸は五港の一つにて

あつまる汽船のかずくは

亞米利加露西亞支那印度

瀬戸内がよひも交じりたり

西宮 住吉 三宮 神戸

六三 磯にはながめ晴れわたる

和田のみさきを控へつゝ

山には絶えず布引の

瀧見に人もものぼりゆく

六四 七度うまれて君が代を

まもるといひし楠公の

いしぶみ高き湊川

ながれて世々の人ぞ知る

六五 おもへば夢か時のまに

五十三次はしりきて

神戸のやどに身をおくも

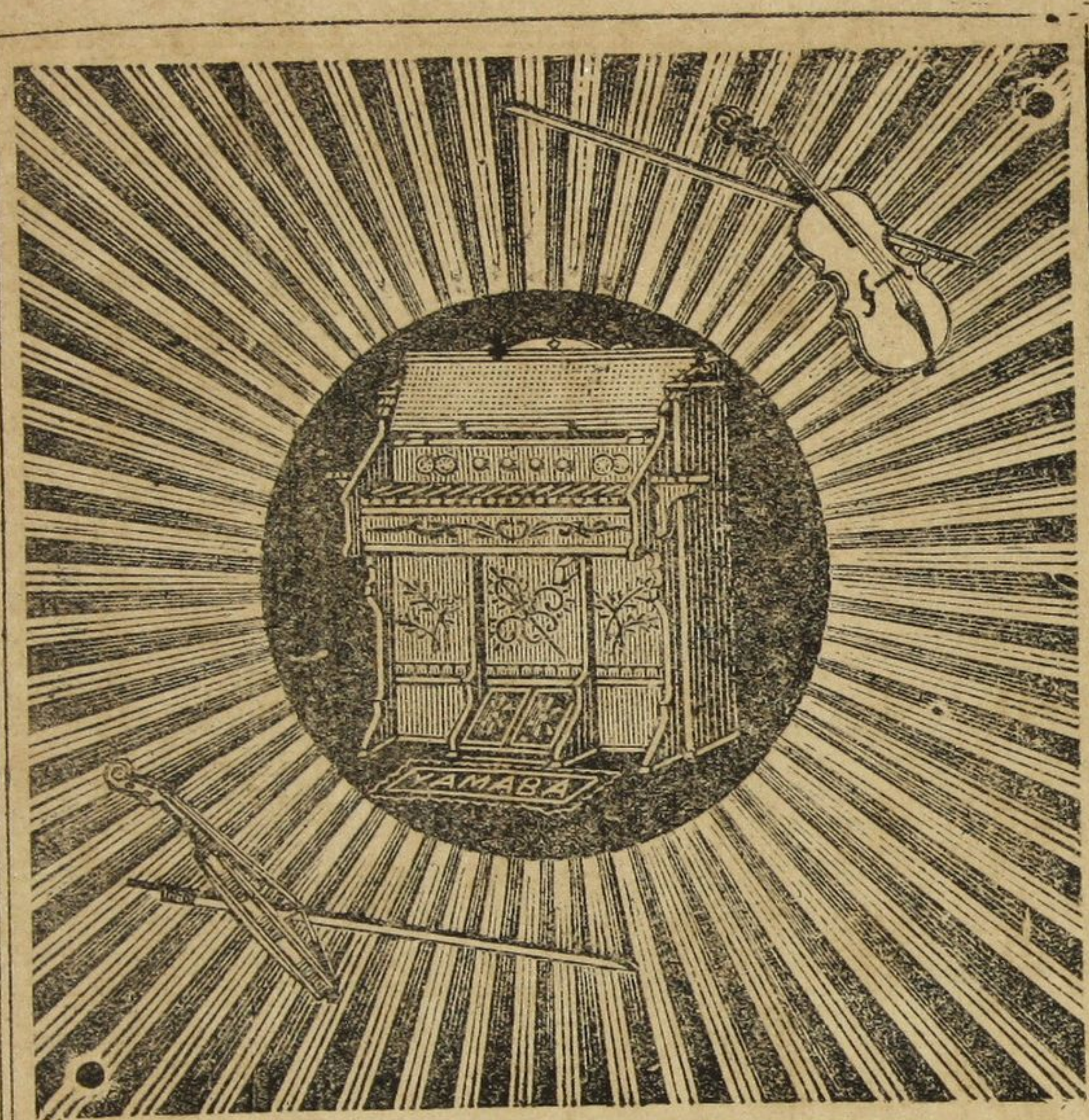
人に翼の汽車の恩

六六 明けなば更に乗るかへて

山陽道を進まゝし

天気は明日も望あり

柳にかすむ月の影



(賣品目錄)

山獨佛京東 製木佛音販 製米音販 風各樂學心 琴器校齋 關ソリオイ ヲ 西關ソリオイ 專販約特社 所賣販書版 所賣販書版 所賣販書版

(町寺寶久北通橋齋心市販大)

三木佐助樂器店

(無代進呈)

明治三十三年五月五日印刷  
 明治三十三年五月十日發行

定價金六錢

著作  
 所有

作曲者 上眞行  
 作曲者 多梅稚

著作者 大和田建樹

東京市牛込區東橫木町二十番地

發行者 三木佐助

大阪市東區北久寶寺町四丁百六番屋敷

印刷者 野村宗十郎

東京市京橋區築地三丁目十五番地

三木書店音樂書略目

東京音樂學校教授小山作之助編纂

新國民唱歌集

第一集 第二集 定價各金六錢

理學博士田中正平校閱  
音樂學校助教授田村虎藏編纂

近世樂典教科書

全一冊 定價金四十錢

大阪府師範學校教諭多梅雅編纂

新日本唱歌

全一冊 定價金十二錢

大阪府女子師範學校長大村芳樹著

音樂遊戯之枝折

全一冊 定價金六十錢

東京音樂學校教授山田源一郎著

圖解 ヴワイオリン指南

全一冊 定價金五十錢